

田中 泰義 (毎日新聞科学環境部・副部長)



世界自然遺産「屋久島」に広がる原生の森。実態に応じた森林管理が求められている＝田中泰義撮影



## 植林ガイドライン策定へ 一貫性求められる政策

【論文名】「森林における生物多様性の保全及び持続可能な利用の推進方策について」(林野庁)

さまざまな生き物がすむ森。しかし、日本では生物多様性を重視した森林の指針は策定されてこなかった。林野庁は2011年ごろに改定予定の森林整備の指針「森林・林業基本計画」に、外来種を含めた生態系の監視体制の強化や動物の生息地の保護対策など生物多様性の視点を本格導入する考えだ。その準備で、来年度の概算要求にも関連予算案を盛り込む。今後、森林管理に携わる自治体や森林所有者は、生物多様性の視点で森づくりに取り組むことが求められそうだ。

### 野生動物による樹皮損傷

林野庁は国土を4キロ四方の格子で区切り、格子の角が森林に該当した約1万

5000地点について、周辺1000㎡の樹木の種類や幹の直径、下草の種類などを5年かけて調べた。

それによると、調査区画内の樹木のうち少なくとも1本が、シカなどによる食害や角(つ)こすりによる樹皮の損傷を受けた「剥皮木(はくひぼく)」だった地点が全体の11%を占めた。1%の地点では、2割以上が剥皮木だった。

樹皮の損傷は商品価値を下げるほか、木が枯れて土壌流出など森林の環境悪化につながる。野生動物による樹木の被害は、暖冬や狩猟の減少で個体数が増えたことが背景だ。林野庁は「全国の森林をくまなく調べて1割の被害ということは、里山の被害がさらに大きいことを示してい

業態別

## 先進企業の 生物多様性配慮

# INDEX

監修：足立 直樹  
(レスポンスアビリティ 代表取締役、理学博士)

### 5×緑 里山植生活動 アネックス / 植栽

ヒートアイランド対策としての緑化はあっても、生態系に配慮した緑化は少ない。そうした日本の「緑」市場において特徴的なのが、5×緑(ごばいみどり)だ。この事業の元になったのが、アクロス福岡の緑化事業である。高さ60Mから階段状に地上までつながるステップガーデンを、60年以上維持・育成できる植生による空中庭園にし、単に緑化するのではなく、地域の植生を調査し、地域の生態系に合った在来種を採用した。

5×緑は、このときのノウハウを活かして、商品化された。フトンカゴ(土木工事で使われる金網でできた直方体のカゴ)

を使ったプランタを立体的に組み合わせることで、大規模な緑化から、個人のベランダまで幅広く対応する。

事業を進めるアネックスが重視しているのが、植生のかく乱を防ぐために、植生域をまたいだ植物流通を極力さけることだ。そのため、関東と関西に各々在来植物の生産をする生産者のネットワークを持ち、里山の環境保全を組み込んだ里山拠点のネットワーク構築を進めている(栃木県の「馬頭の森」、滋賀県高島の「畑の棚田」)。

この活動から生産された植物が、先日、渋谷区広尾に本移転・竣工された山種美術館で利用されている。植栽が行われたのは、同美術館のエントランス部分と2～6階のテラス・建物外周で、使用された植物



↑エントランスに植えた植栽の事前養成の様子



→山種美術館・エントランスの植栽

はすべて関東地方の里山を構成する在来50種。エントランスにはテイカカズラと金網による垣根を、2～6階には里山の多様な草木で構成されるユニットを、外周には植物を絡ませたユニットを設置している。エントランスのかずら垣などは、1年も前から植栽・養生を行ってきている。